
ゴメンね

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴメンね

【著者名】

和藤渚

N5825E

【あらすじ】

とあることでフィギアとしか話さなくなってしまった少年の話
氣弱な僕の強気な生活（仮）番外編

(前書き)

これは、べた恋企画第2回「恋をテーマにした作品です
恐らく、気弱な僕の強気な生活（仮）がわからなくて読めると思います（汗）

この日もいつも通り登校していた僕、谷口龍一^{たにぐちりゅういち}。すると校門のところに髪の長いかわいい女の子が立っていた。

(あの制服はルドルフ学園の)

ずっと校舎の方を見ていた

「どうしたんですか?」

と声をかけると

「あの大道信虎っていうひとこの学校に」

「はい。いますよ。僕のクラスに。それがどうしたんですか?」

「いやなんでもないです」

といつて足早に去つていった。

(なににきたんだる?)

昼休み

「大道、へ~買つたんだ?」

「あ、うん」

「よくそんなん買つよな? 好きなのか? けつこうつ金かかるんだろ? それって」

(話しかけてくれた)

大道君は嬉しそうに口を開いた

「まあそういうやつもあるけど

「村内、お前そんなん興味あんのか? 気持ち悪い」

「なわけねえだろ? あ!」

としまったという顔で大道君を見る村内

うつむいてこういった

「ゴメン用事があるから。つるさーから教室でよつか？ くるみち
やん」

と悲しそうに大道くんは教室から出て行つた
(は〜また自分の殻に入っちゃつたよ……)

そう僕のクラスには未だにクラスメートのみんなに
なじめない人がいる。それは大道信虎くん。出席番号3番
いわゆるオタクって人である。村内が見せろつていつてたのは
くるみちゃんのフィギアである。くるみちゃんとは今大人気
のアニメのヒロインである。もともとアダルトゲームのヒロイン
でオタクの間ではその時からメジャーになつてたが、アニメ化さ
れて一気に

一般の人たちにも人気に火がついた格好となつた。

いつもこんな風に話をかけてはいるが、一言一言返事してあとはフ
イギアとしか話さない。

そんな彼に僕たちは手を焼いている。

「おい！」川ジャマしてんじゃねえよ！－！ 珍しく好感触だったの
に

「まだだね」

「誰のせいだよ？」

「いつもあ〜だもんな」

「私あの人苦手。キモいし」

「でもなんとかしないと……」

「そうね、私達のクラスメートだし
と僕たちは話し合つた

僕の名前は大道信虎おおみちのぶとら。小さい頃からアニメやゲームが好きです」と夢中になっていました。

おおきくなつていぐに連れて周りもいつの間に避けられていきました。そして中学2年の時

衝撃的なことを言われたのです。

それはある日忘れ物を取りに教室に戻つたときのこと何人か教室に残つていたのです。

「なあ大道、きもくねえー」

「うんうん、すげーオタクだし」

「この間さ、あいつと話してたらさ、俺まで白い目で見られてよ
まいったぜ」

と小さい頃からの友達の望くんの言葉でした。

すごいショックでした。それに追い討ちをかけるよう

「小倉? 大道お前のこと好きらしいぜ?」

「十分あるぜ。だって唯一の女友達だもんな」

「木根くん? それは冗談でもやめてよね。ゾッとしたじゃない」

「あんな薄気味悪い人から告白されたら……いや想像しただけでも

気持ち悪い」

「誰だつてそうだよ」

「すげー小倉鳥肌立つてんじゃん！！」

「フツたら呪われそうじゃない？」

「ハハハハ。ありえるぜ。夜な夜なうなされるみたいな

「ちょっと」

ちらつと廊下を見る小倉

（信虎くん！……）

と好きな子からあんなこと言われたのです。その時僕は必死に走りました。そういまで仕方なく付き合つてたのです。

所詮オタクは普通世界から^{ヒテ}排除される存在と悟りました。

それからはフイギアにしか話さないようにしました。それが一番傷つかずに済むから……

「みんな、表面だけでしか付き合わない、腹の底では……僕をわかつてくれるのは

くるみちゃん、君だけだよ」

と屋上でグラウンドを見ながら大道はそういった。

放課後部活も終わり帰つていると今朝の女人がたつていた。

「あつ今朝の」

「ちょっとお話を」

と女人が言った

僕たちは喫茶店にいった

「話つてなに？」

「実は信虎くんに私あやまりたいんです」

といきなり大きな声をだした

「どうしたんですか? こきなり。それに謝るって何を?」

「実は……」

と中学のこと話を小倉。

「そつか。それでか。実は10月になつても大道君クラスになじめてないんだ」

「そなんですか……」

とがつかりするような表情を見せる

「そうだ」

と僕は思いつき、何人かのクラスメートを呼んだ。そして今までの経緯を話した

「てなわけでなじめるようにするにはどうすればいいかな?」

「それなら自分も同じ田線で付き合つてみるのはどうだ?」

と福川

「同じ田線ね? 確かにその方が仲良くなりやすいね。他には?」「う~ん……オタクとか関係なく誠心誠意を持つて接する。それが一番! ! !」

ともつともな意見をだす水島さん

「結構難しいよ? それ……そらができるればこいつなつてないと思つよ? 他には?」

「一度遊んでみるのは? このケーキおいしい~」

「いいアイディアだね。大友さん、話に集中してね」

「難しいな……俺ははやはり自分から歩み寄らなければ仲良くなれんと思うが」

とも何んとも村内君らしい意見が出る

「そうだ!! 彼、1週間後……」

と小倉がとあることを思い出した

と話し合つみんな。

「それだ!!」

「いいね。それ」

「でもうまくいくかな?」

「やつてみないと」

「だね」

なんとかいい案がでた。

翌日もその次の日ももみんないつこく大道君に話しかけた。
しかしみんな惨敗……そしてまた教室をでていつたそんな日が1週間
間続きついにこの日がやってきた

放課後

「ぐるみちゃん？ 今日もいい天気だね？ このまま寝ちゃうそ
だよ」

「あつ！ いたいた。大道君」

「なんのようだい？」

ととげととげしい口調で大道くんがいった。

「何してんのかな？ つて思つてさ。いつもこいで日向ぼっこしてた
んだ」

「いこつか？ ぐるみちゃん」

「釣れないな」相変わらず。僕はいや僕たちはただ君と友達になり
たいだけなのに」

「どうせ上辺だけだろ？ 腹の底ではきっと僕は気持ち悪いと近寄り
たくないとか
思つてんだろ？」

「果たしてそれはどうかな？ ちょっと来て欲しいといがあるんだ
？」

と僕は大道くんの手をひいて教室まで連れて行つた

「ドア開けてこらん？」

と誘導する僕。大道君はドアを恐る恐る開けてみた
パーンパーンというクラッカーの音の後

パチパチパチと拍手がおこつた

「誕生日おめでとう！…… 大道君」

「おめでとう大道」

とそこにはパーティー会場があつた

「みんな……」

「実はさ今日が大道君の誕生日って知つてね。みんなでパーティー
しよう

つてなつてね」

「俺はさ、お前がなじめないのにパーティーやつても意味がないつ
ていつたんだけどな？」

と村内くんそういう言つと

「何言つてんだよ？ 一番張り切つてたのはおまえじやん

「つるせ～」

と福川くんが突つ込む。

「村内君はね、いろいろと指揮してくれてセッティングしてたんだ
？ いつもはふざけてばかりの福川くんだつて、水島さんだつて
「」の料理やケーキは全部、谷口が作つたんだぜ？ 調理実室つかつ
てな」

「みんなそれぞれ一生懸命」のためにやつてきたんだ。それでも上
辺だけ

だと思つ？」

「ありがとう。」んな僕のために」

と純粋に感動している大道。

「当たり前じやねえかクラスメートだもん」

「僕、オタクだよ？」

「そんなの関係ねえ～よ。それだけ夢中になれるものがあるつてこ
とだろ？」

「うらやましいな。私も夢中になれるもの見つかるかな？」

大友が関心するように「うと

「なに言つてんだよ？ もう見つけてんじゃねえか」

「なに？」

「福川くん」

と大道君がいつた
「言われちやつた」

「ハハハハその調子だ。大道」

パーティーはあつという間に時間が過ぎ、プレゼントを渡す時間になつた

「はい。プレゼント」

とみんな一人一、人大道君にプレゼントを渡していく

そして僕の番になつた

「ちょっと待つて」

と僕は教室の外にでた

「大丈夫かな？ ちゃんとできるかな？」

と緊張するその人。

「できるよ？ そのために来たんでしょう？ それにこれがメインなんだから勇気を出して」

と励ましドアを開けその人の背中を押して教室にいれた

その瞬間みんな一瞬の沈黙の後に驚きの大フィーバーが起つた。

一方大道君は一瞬にして顔色が変わりうつむいた。

「小倉智子じやねえか」

「お前これはやりすぎなんじゃ？ 本当につれてきたのかよー」

「そんなにすごい人なの？ この人」

「たくいつもそういうのにうといんだからお前は……」

と水島くんに言われた

「去年ミスマガジンでグラントレーニングで今、くるみちゃんの声もやつてゐる、今大人気のグラビアアイドルさ」とあるクラスメートに説明され

「へ～そうだつたんだ」

と僕は関心した

「知らないで連れてきたのか？　お前」

「うん」

と即答でこたえると

「お前な～……」

とみんなが呆れた

「いや自分から言つてきたんだよ？　ていうかこのパーティーも小倉さんが発案者

なんだ」

「そうなの？」

小倉さんは大道の前に行つた

「「メンね？　大道君、いや信虎くん」

「謝られても」

「そうよね？　心に深くついた傷は『「めんなさい』』一言じや治るはずもないわね」

「今更なに謝りにきてんだよ。帰れよー！　俺がこうなつたのはお前のせいなんだから」

「大道が俺つていつた！！」

と驚く福川

「そんなこと言わないでよ。小倉さんだつて意を決してきてんだからさ」

となだめる僕

「そうよ。私のせい、全では私のせい。私が素直になれなかつたから……」

「どうことだよ？」

「あの時ね」

「なあお前つて好きな人とかいるのかよ?」

「いや」

「そのときドキッとした

「そつか」

とホッとしたのもつかの間

「大道とか?」

私はすごく動搖した。必死に見せまいと

「……といつてしまつたのゴメンね。その結果あなたを傷つけることになつてしまつた。一生その傷は消えることはないだらうけど。謝つても謝りきれない」

「もういいよ。いまさらそんな話したつて仕方ないし」

「それを謝りにきたのもう一つ。お願いがあるの」

「なに?」

彼女は改まつて

「大道信虎さん、私、あなたのことがずっと前から好きでした。付き合つてもらえませんか?」

「嘘!……大道がアイドルに……」

「これは夢だ。絶対に夢だ」

と福川が呆然し、倉本が悔しがる

「さあ? どうする? アイドルからの告白だぞ?」

と村内が返事を促す

「はい!……よろこんで」

こうしてオタクとアイドルといつオタクにとっては夢のよつたカツ

フル

が誕生した。そしてその口を境に彼どんどんクラスに溶け込んでいった

つた

今では……

「ここ」のクリアの仕方わかんないんだけど？」

と男子と話し

「ああここね、みんなここでつまびくんだよね。ここからここと
おつてグラウンドブレス
をとつて……」

「大道君？」

智子ちゃんとびうなつてんの？」

「ああ昨日久しぶりに一日デートしたんだ？」

「まさか大道君からのわけ話きけるなんてね」

と女子と話す

でも

「ぐるみちゃん、みんなが誘ってくれたんだ。一緒にに行こうね？」
と相変わらずファイギアと話すことはやめなかつた。

「彼女いるのにね」

「ああ。でもあれがあいつだよ。あいつがファイギアと話せなくなつたら

本気で心配するよ。おれ」

といつ福川くんに対して

「そうだね」

と僕はうなづいた。

(後書き)

氣弱な僕の強気な生活（仮）もよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5825e/>

ゴメンね

2010年10月15日22時29分発行